

『平家物語』

——以仁王と源頼政 覚書——

生 形 貴 重

1 はじめに

『平家物語』の構想論は、その成立のあり方、すなわち形成過程や編集過程の重層的な実態、あるいは諸本の複雑な存在のあり方の究明が徐々に明らかにされて行くにつれて、論じられる機会が少なくなつたと思われる。そこには、「構想」という言葉の概念が個人的な「作者」を前提にしない『平家物語』研究の場合、論理的に成り立ちにくいという理由があるのだが、諸本の複雑なありようを越えて、『平家物語』が作品としての秩序や統一を持ち続ける意味を明らかにするためには、「構想論」とも呼ぶべき内在的な文字性への論及も必要となるだろう。

筆者は、かつて『平家物語』の「基層」と「構造」に視点を当てて、この物語の成立や語りものへの移行について、龍神信仰や神仏

の意志の表現（前兆・奇瑞・予言などの記事）を視点としながら、物語の構造を構想の観点から論じようとしてきた^①。その後、物語の基層の文脈に、「日本国大將軍」の地位が清盛・重盛という平家の側から源頼朝に移行する構想の潜在を、延慶本を中心に指摘し、また、延慶本の本文の基層部分に先行する伝承素材を、共通語句や独自本文の抽出から試みた^③。『平家物語』の構想論は、具体的な本文の形成過程と先行する伝承・物語・資料等の編纂のあり方が具体的に論じられなければ、抽象論に終始するという考えからであった。

その後、筆者は、延慶本を中心にして、物語の構成と構想とを分析しつつ、具体的に物語の始まりから順を追って、それまで析出した物語の構想がどの様に展開していくのかを論じ、また、物語本文を読み解くために、説話の本文が形作る文脈を構想論的に読み解く解釈の論を提示した^⑤。しかし一方で、『平家物語』研究が詳細な書

誌的な実証作業に埋没せぬように、物語世界を成立させた伝承環境などについても、特に説話的な側面や宗教的側面についても論じてみた。^⑥

このような研究の立場から、本誌「同志社国文学」前号には、鹿谷事件の成親と西光の描かれ方について、構想の論を掲載させて頂いたが^⑦、本稿は、右のようにな研究の流れに沿いながら、『平家物語』巻四における以仁王と頼政について、物語の構想にどの様に位置づけて解釈すべきかということを覚書として述べるものである。

2 「末代ノ賢王トモ申ベシ」をめぐって

治承四年に起きた以仁王と頼政の反乱事件は、おそらく『平家物語』に採り入れられる以前にある程度の物語としてまとまりのある作品として存在していたのではなからうかと考えてよいだろう。

『平家物語』も、以仁王事件の冒頭は、諸本よく似た文章で以仁王の紹介から語り出している。今、延慶本の本文を引用してみる。

一院第二ノ御子^{ミコ}、以仁王ト申ハ、御母ハ加賀大納言^{スズナリ}季成卿御娘トカヤ、三条高倉ノ御所ニ渡ラセ給ケレバ、高倉ノ宮トゾ申ケル。去永万元年十二月六日、御年十五ト申シニ、皇太后宮ノ近衛河原ノ御所ニテ忍テ、御元服有シガ、御年卅ニナラセ給ヌレドモ、未ダ親王ノ宣旨ヲダニモ蒙ラセ給ハズ、御手跡ナドウト

クシクアソバシテ、和漢ノ才秀給ヘル仁ニテヲハセシカバ、
「位ニモ即マシク」タラバ、未代ノ賢王トモ申ベシ」ナト申人々有ケレドモ、此世ニハ継子ニテ打籠ラレサセ給テ、花ノ下ノ春ノ遊ニハ、宸筆下テ、手カラ御製ヲ書キ、月ノ前ノ秋ノ宴ニハ、玉笛ヲ吹テ、自カラ賀音ヲ操リ、詩歌管弦ニ御心ヲナグサメテゾ過サセ給ケル。

(延慶本第二中八)頼政入道宮ニ謀叛申勸事 付令旨事^⑧傍線筆者) 右の以仁王紹介記事については、諸本ほぼ大同小異であるが、しかし「此世ニハ継子ニテ」という表現の諸本比較と、「花ノ下ノ春ノ遊……、月ノ前ノ秋ノ宴……」の対句の典故から、延慶本の本文が最も古い形を示しているであろうことは、はやく島津忠夫氏のご指摘の通りであろう。^⑨

さて、その以仁王の紹介記事を、覚一本と照らし合わせてみよう。次に、覚一本の本文を引用する。

其比一院第二の皇子以仁の王と申しは、御母加賀大納言季成卿の御娘也。三条高倉にましましければ、高倉の宮とぞ申ける。去じ永萬元年十二月十六日、御年十五にて、忍びつ、近衛河原の大宮の御所にて御元服ありけり。御手跡うつくしうあそばし、御才学すぐれて在ましかれば、位にもつかせ給ふべきに、故建春門院の御そねみにて、おしこめられさせ給ひつ、花のもと

の春の遊には、紫毫をふる(ツ)て手づから御作をかき、月の前の秋の宴には、玉笛を吹て身づから雅音をあやつり給ふ。かくしてあかしくらし給ふほどに、治承四年には、御年卅にぞならせましける。

(覚一本巻第四「源氏揃」)

右に見るように、きわめてよく似た文章ではあるが、覚一本には、延慶本に語られている「末代ノ賢王トモ申ベシナド申人々有ケレドモ」という部分が微妙に消失して、「故建春門院の御そねみにて」世間から押し込められたという本文に変化していることが分かる。

覚一本は、高倉天皇を擁立せんとしていた平家勢力と、その政治的なライバルになる可能性をもった以仁王との関係を、「故建春門院の御そねみにて」という具合に文章にまで表現して、彼が政治的にも押し込められた存在であったことを語ったものであろうが、諸本を照らしみると、四部本・長門本・盛衰記などの本文が延慶本の形を取っているので、覚一本の本文が後出的な本文であることが推測される。

そこで問題となるのが、延慶本以下、四部本・長門本・盛衰記などの本文が語っていた以仁王の評である「位ニモ即マシく／＼タラバ、末代ノ賢王トモ申ベシ」という評価の言葉である。

長門本・盛衰記は、「位にもつかせおはしましたらば、末代の賢

王とも申つべしなど人々申されけれども、此女院には継子にて」(長門本)、「御位ニ即セ給タラハ末代ノ賢王トモ申ツヘシナト人々申ケレトモ女院ニハ継子ニテ」(盛衰記)と、建春門院と考えられる「女院」が突如本文に記される。この場合、「此女院には継子にて」という文意自体に不明な点を感じるが、このことは、おそらく長門本が覚一本などの語り本の影響を受けたものかと推測される。

文脈からすると「女院」が誰を指すのかが不明確で、やはり本来の本文は、延慶本のように「此世ニハ継子ニテ」とあるべきで、長門本は、覚一本的な本文を見つつ、先行する延慶本的な本文の「此世」を「此女院」と誤って記した可能性が高いと思われる。盛衰記は、この長門本の本文をここでは引き継いでいったものである。

細かなことに立ち入ってしまったが、『平家物語』は、以仁王と頼政の物語を語り始めるとき、あるいは既に素材としてあった以仁王と頼政の事件の顛末を描いたであろう物語を採り入れるときに、以仁王を「末代の賢王」として評価していたという点が読み取られなければならないのではないだろうか。

3 もう一人の「末代の賢王」

さて、この「末代の賢王」という評価は、『平家物語』にあつては最大級の人物評価の言葉である。しかも、その最大級の評価は、

物語の世界の評価であつて、いわゆる物語の構想を反映した評価のようであり、史実のレベルを越えた物語独自の人物造形に関わるものではなかつたか。

たとえば、「末代」という末法史観の中で「賢臣・良臣」として賞賛されるのは重盛である。一例を彼の死去の追悼説話から引用しておこう。

実ノ賢臣ニテオハシツル人ノ、末代ニ相応セテ、トク失給ヌル事コソ悲シケレ。……(中略)……本朝末代ノ良臣ノ賢サハ遙ニ猶勝タリ。

(延慶本第二本廿三「小松殿大国ニテ善ヲ修シ給事」)
右にあるように、「平家物語」では、「末代」に不相応なほど優れ、世界的にも飛び抜けて優れているという重盛の賞賛記事にも、「末代」「賢臣・良臣」という言葉が組み合わされているのである。「末代」と組み合わせられた「賢臣・良臣」と同様に、「末代の賢王」という言葉には、物語が以仁王を史実を超えて物語の世界で高く位置づけようとする構想を見て取れるのだ。

さて、以仁王と同様に、さしたる政治的な実績もないのに、最大級の評価を受けているのが高倉上皇であつた。後にも少し触れるが、『平家物語』は、少なくとも作品世界を成り立たせる重要な人物の死去に関しては、いわゆる追悼説話群ともいふべき説話的文脈をも

つて一連の人物評価を語る。清盛・重盛も同様であり、また高倉上皇についてもそうである。しかも、これらは、『平家物語』独自の人物の描き方であり、物語がこのような追悼説話群で描く人物は、ある意味で物語の構造にとつて不可欠な人物でもあるのだ。

高倉上皇は、清盛の悪行物語としての前半世界の中では、語り本では特に目立たない描かれ方なので、今日まであまり人物論としての着目は少なかつたが、一貫して孝子として好意的に描かれている。たとえば、以仁王・頼政事件の直前には、高倉上皇は巖島參詣の途次、幽閉中の後白河法皇を訪問し、父子再会を果たす。

上皇ハ御対面ノ御事ヲ、能々悦申サセ給フ。今年ハ廿チニ満セ給フ。御物思月日重テ、少シ面ヤセテワタラセ給ニ付テモ、御冠際ヨリ始テ、アテニウツクシク御面影サヤカラヌ月影ニハエテ、イト清ゲナル御鬢茎ホコラカニ愛敬ゾキテ、御淨衣ノ袖サヘ朝露ニシホレニケルモ、イト、良タク、故女院ニ似マイラセサセ給タレバ、昔ノ御面影被テ思召出、哀ニゾ被思食ケル。「今一度見マイラセズシテ、イカナル事モヤト心愛候ツルニ」トテ、上皇立セ給ヘバ、法皇ハ御余波尽セズ思召ケレドモ、日景モ高クナレバ、「シバシ」トモ申サセ給ハズ。何トナキ様ニモテナサセ給ヘドモ、御泪ノ双眼ノウカバセ給テ、御袖モシホレケレバ、シルクゾミエサセ給ケル。人々モ皆袂ヲカヘシ、涙

ヲ拭ハル。上皇ハ法皇ノ離宮ノ故亭、幽閑ノ寂寞タル御スマキ
ヲ御心苦ク見置キマイラセ給ヘバ、法皇ハ又上皇ノ旅泊ノ行宮、
船ノ中、浪ノ上ノ御有様ヲ勞シク、誠ニ宗廟ノ八幡加茂ヲ奉テ
閣、都ヲ立離レ、八重ノ塩路ヲ凌ツ、遙々ト安芸国マデ思食
立ケム御志ノ深サヲバ、争カ神明ノ御納受モ無ラム。御願成就
無疑トゾ覺エシ。

(延慶本第二中六「新院厳嶋へ御参詣之事」)

幽閑中の父法皇を訪れ、「誠ニ宗廟ノ八幡加茂ヲ奉テ閣」厳島に
参詣する高倉上皇の心は、「争カ神明ノ御納受モ無ラム。御願成就
無疑トゾ覺エシ」と賞賛される。それ故に、孝子高倉上皇の姿は、

「御冠際ヨリ始テ、アテニウツクシク御面影サヤカラヌ月影ニハエ
テ、イト清ゲナル御鬢莖ホコラカニ愛敬ヅキテ、御淨衣ノ袖サヘ朝
露ニシホレニケルモ、イト、良タク、故女院ニ似マイラセサセ給タ
レバ」と、後白河法皇の父としての目を通して美しく描かれるのだ。
史実のレベルでは、この厳島参詣は、前年のクーデターで樹立し
た平氏政權の示威行為として、皇室の宗廟神を敢えて無視して、平
氏の宗廟神としての厳島に上皇を参詣させるといふ、清盛の政策の
一環であつたと思われる。しかし、物語では、宗廟の神々をさしお
いて厳島に詣でる高倉上皇の心の内を、孝子高倉上皇として描こう
としているのだ。そのことは、高倉上皇が南都北嶺の宗教勢力の反

対の中で、

「帝王位ヲサラセオハシマシテ後、諸社ノ御幸初二ハ、八幡、
賀茂、春日、平野ナドへ御幸有テコソ、何ノ社ヘモ御幸アレ。
イカニシテ西ノハテノ嶋国ニワタラセ給社へ御幸ナルヤラム」
ト、人アヤシミ申ケレバ、又人申ケルハ、「白河院ハ位ヲサラ
セ給テ後、先熊野へ御幸有キ。法皇ハ日吉へ参ラセ給。先例如

此。既ニ知ヌ、叡慮ニ在ト云事ヲ。其上御心中ニ深キ御願アリ。
又夢想ノ告モ有」ナムドゾ仰有ケル。

(延慶本第二中四「新院厳島へ可有御参事」)

と、自ら「心中ニ深キ御願アリ」として、「夢想ノ告」によつて参
詣するのだと説明されている点や、この後に大塔建立説話を配置す
る延慶本の構成からも読み取ることが出来る。

このように物語は高倉上皇を孝子として構想し位置づけている。
そして、その死去の後にも、漢文学にも長じ、情愛の深さと天子と
しての自覚を持つ理想的な帝王として、史実からは相当隔たった形
で造形されている。その死去の追悼の文章に、次のような言葉がづ
づられている。

内ニハ五戒ヲ持テ慈悲ヲ先トシ、外ニハ五常ヲ乱ラズ礼儀ヲ正
クシ給キ。末代ノ賢王ニテ渡セ給シカバ、万人奉惜事、一子ヲ
失ヘルヨリ甚シ。

〔延慶本第三本三〕新院崩御事 付愛紅葉給事〕

右のように、高倉上皇もまた「末代ノ賢王」として物語に位置づけられており、『平家物語』は、高倉宮以仁王と高倉上皇の二人に共通して「末代ノ賢王」という最上の呼称を冠しているのである。この点は、物語の人物論の中核に据えておかねばならない点であろうと思われるのだ。

4 頼政の鶴退治の物語上の意味

以仁王に冠せられた「末代ノ賢王」という評価は、いままであまり採り上げられなかったが、高倉上皇とともに以仁王も「末代ノ賢王」として構想され位置づけられていたとするなら、以仁王・頼政事件という構図も、もう少し構想的に解釈してみる必要があると思われる。

『平家物語』の基層的な文脈に、院の王権と武門の棟梁（日本国大將軍）とが末代には協力し合って世界を支えるという政治的な理想が存在し、日本国大將軍の座が平家から源頼朝へと神仏の意志で移行されていくことが語られていることを、筆者は『平家物語』の構造をふまえて論じてきた。^⑭たとえば、院の王権と平氏との関連でいえば、白河院・鳥羽院の時代における忠盛の説話（祇園女御説話・得長寿院説話・殿上閣討説話など）は、すべて院との関係がき

わめて好意的に描かれている。これは、おそらく院と武門とが互いに協力し合うという物語の政治的な理想が、白河院・鳥羽院の時代に投影された一面があるからではなかったか。しかし、物語は、

鳥羽院御晏駕ノ後ハ、兵革打ツゞキ、死罪、流刑、解官、停止、常ニ被行テ、海内モ不静、世間モ落居セズ。就中、永曆応保ノ比ヨリ、内ノ近習ヲバ院ヨリ御諷アリ、院ノ近習ヲバ内ヨリ御諷アリ。カ、リシカバ、高モ賤モ恐レ怖キテ、安キ心ナシ。深淵ニ臨テ薄氷ヲ踏ガ如シ。

（延慶本卷一本八）「主上々皇御中不快之事 付二代ノ后ニ立給事」とあるように、鳥羽院の時代以降、「院」と「内」との対立が始まり、高倉天皇を擁立した平氏が台頭すると、その対立は「院」と「内」化した平氏との対立となっていくのだ。特に延慶本が「愚管抄」と記事を重ねながら、その点を克明に描いていることも既に論じたところである。^⑮

本来神々から節刀をたまわって朝廷の守りとなるべき平家が、院の王権と対立を際立たせていくことが清盛による悪行の物語的構造であり、それは龍神の破壊・創造を両義的に持つ神の力を背景にしているのだ。そうして、清盛は、龍神のアラブル神性をもって世界を解体に導くのだが、いま問題としている以仁王事件にその悪行の構造を当てはめてみると、以仁王と頼政の反乱は、「末代ノ賢王」

の可能性を持つ皇子と朝廷の護りたるべき資質を持った武門の棟梁を、清盛が都から排除する悪行物語として位置づけられはしまいか。

頼政の死去の後に語られる鶴説話は、「末代ノ賢王」としての以仁王の対極に、朝家の護りたるべき武士の棟梁としての頼政の資質を物語に定位する説話でなかったかと考えられる。

頼政の追悼説話である鶴説話の諸本比較^⑤については、紙幅の関係で触れないが、この説話の物語での意味は、やはりその説話の型、構造にあるといえるだろう。

鶴退治は、日本文学史の中に流れ続ける怪物退治の物語の精神史の文脈からも読み取られ解釈されなければならないと思われる。古代の王権の成立から、秩序に敵対するマツロワヌモノたちを、秩序の側が退治するという物語の伝統だ。『平家物語』には、諸本によって鶴退治のあり方が異なるが、基本的には、「仁平ノ比ヲヒ、近衛院御在位ノ時」の説話が根本になるので、簡単に説話の要素をまとめておこう。

- ア 主上、夜な夜な怯えることあり。
- イ 有験の高僧達の大法秘法も通じず。
- ウ 丑の刻に黒雲が御殿を覆い、主上苦しむ。
- エ 堀河天皇の時代、將軍源義家の前例に習い、源平両家から頼政が選抜される。

オ 頼政、井ノ早太を従え参内し、鶴を射落とす。

カ 鶴の正体が判明し、ウツホ舟に入れて流す。

右が鶴退治の核となる説話の要素であり、『平家物語』は、その核となる要素を頼政の和歌説話でもって包み込んで文芸化しているのである。延慶本は、鶴退治の後に中国の磁石山の記事を語り、鶴説話を「不思議ナリシ異禽ナリ」と結んでいる。興味深いことは、この中国の記事に描かれた磁石山を、最初に楽しみしか知らなかった王が「ワザワヒト云物」がいかなるものかと求めたということが語り出す所だ。まさに、鶴の本質を射抜いた言い方であって、鶴に象徴されるモノの本質は、国家的な災い、つまり朝家の敵なのである。頼政は、この朝家の敵を武威によって鎮めることの出来る勇者であるからこそ、「將軍義家ノ朝臣」を前例として「源平両家中ヲ撰セラレ」たのであった。ここには、明白に頼政を源平両家中の「將軍」として位置づける視点が認められるのだ。

右のアイカの説話の要素も、前半のアイウは、主上の苦しみであるから、もう少し象徴的に内容を記号化すれば、「モノの侵犯による世界の中心の危機」とまとめられよう。後半は、「モノを平らげる事による秩序の回復」であり、災厄の種は、再び異界に向けて「放逐」されるのである。

彼方からの侵犯・秩序の中心の危機・秩序の回復・モノの放逐、

という構造によって鶴退治は成り立っており、主人公に頼政が据えられたのには、「末代ノ賢王」を補佐しうる「將軍」という位置づけを、物語が編纂され、以仁王の反乱の物語が『平家物語』に採り入れられる際、意識されていたのではなからうか。

5 おわりに

以仁王と頼政という二人の人物は、「末代ノ賢王」と「將軍」の可能性を持った人物として物語に位置づけられていたと思われる。以仁王を殺害するのみならず、人臣の身におとしめて事件を処理し、頼政一族を滅ぼした清盛は、物語が理想と描く「院の王権」と「大將軍」との協調体制を、一時地上から駆逐する悪行を行ったのだ。そして、この事件は、またもう一人の「末代ノ賢王」をも死に至らしめる。

猿程二、新院日来ヨリ御乱心地不意ノミ渡セ給ケルガ、此世中ノ有様ヲ歎思召ケルニヤ、御惱弥ヨ重ラセ御マス。カ、リシカバ何ノ沙汰ニモ不及。一院ハ何ガセムト歎思召ケル程二、十四日、六波羅ノ池殿ニテ終ニ崩御ナリヌ。御年廿七、ヲシカルベキ御命也。新院ノ御遺誠ニ任テ、今夜即東山ノ麓、清閑寺ト云山寺へ奉送。御共二ハ、上達部五人、隆季、国綱、実定、通親今一人不見、其外殿上人十人、前驅十人、供奉仕ルトゾ聞ヘシ。

郡（「邦」の誤写）綱御娘、別当三位殿ヲ始トシテ、近被召仕ケル女房三人、御グシ下テケリ。朝霞ニタグヒ、暮ノ煙ト登給ヌ。内ニハ五戒ヲ持テ慈悲ヲ先トシ、外ニハ五常ヲ乱ラズ礼儀ヲ正クシ給キ。末代ノ賢王ニテ渡セ給シカバ、万人奉惜事、一子ヲ失ヘルヨリ甚シ。

（延慶本第三本三「新院崩御御事 付愛紅葉給事」）
清盛の悪行は、そのちまた超過して、高倉上皇をも死に至らしめる。「末代ノ賢王」の喪失である。

こうした清盛の悪行は、院の王権との対立から徐々に重層的に超過していく構成になっており、その最終段階で神々が平家を見放し、新たな日本国大將軍として頼朝が登場する。このような、源平両家の將軍移行の物語構造が、また延慶本の第二中（巻四）から第二末（巻五）の得意な編纂形態に直結しているのである。物語を構造的に、構想的に解析する中からも、物語の世界の豊かに文学的側面は、まだまだ究明されるはずだ。

（千里金蘭大学人間社会学部教授）

（注）

- ①拙著『平家物語の基層と構造』（近代文芸社刊 昭和五九年二月）
- ②拙稿「平家物語と冥界―龍神侵犯と世界の回復 大將軍移行の構想―」

〔日本文学〕第三六卷四号 昭和六二年四月)

③ 拙稿「新中納言物語」の可能性―延慶本『平家物語』壇ノ浦合戦をめぐって―(『大谷女子短期大学紀要』第三二号 昭和六三年三月)

拙稿「先帝入水伝承」の可能性―延慶本平家物語「先帝入水」をめぐって―(『軍記と語り物』昭和六三年三月)

④ 拙稿「猶武勇の家他に異なるか―殿下乗合事件の視角―」(『大谷女子短期大学紀要』第三四号 平成三年三月)

拙稿「代の乱ける根本は」考―延慶本『平家物語』を中心に―(水原一氏編『延慶本平家物語考証 二』 新典社刊 平成五年六月)

〔延慶本『平家物語』鹿谷事件覚書〕(同志社国文学会編『同志社国文学会創立四十周年・国文学会創立三十周年 記念論文集』平成六年十一月)

拙稿『平家物語』プロローグ部小考―四部本の形態の意味するもの―(水原一氏編『新典社研究叢書九一 古文学の流域』 新典社刊 平成八年四月)

⑤ 拙稿『平家物語』の構造と説話的文脈―延慶本を中心として―(説話と説話文学の会編『説話論集』第一巻 清文堂刊 平成四年四月)

拙稿「文覚説話の文脈―延慶本『平家物語』における説話と物語―」(水原一氏編『平家物語 説話と語り あなたが読む平家物語2』 有精堂刊 平成六年一月)

⑥ 拙稿「壇ノ浦覚書―雲上ノ龍降テ海底ノ鱗ト成給 考―」(山下宏明氏編『軍記物語の生成と表現』 和泉書院 平成七年三月)

拙稿「平家物語の生成と伝承―成立と伝承圏―」(『平家物語の生成 軍記文学研究叢書5』 汲古書院刊 平成九年六月)

⑦ 拙稿「成親と西光 『平家物語』諸本文対照の方法的試論」(同志社国文学会編『同志社国文学専攻五十周年・国文学会設立四十周年

記念論文集』二〇〇四年十一月)

⑧ 小川栄一・北原保雄氏編『延慶本平家物語』本文編(勉誠社刊 平成二年六月)による。

⑨ 鳥津忠夫氏「以仁王と頼政」(鳥津忠夫著『平家物語試論』 汲古書院刊 一九九七年七月)

⑩ 高木市之助氏他編『日本古典文学大系32 平家物語 上』(岩波書店刊 昭和三十四年二月)による。

⑪ 国書刊行会編集『平家物語 長門本』(名著刊行会刊 昭和四九年八月)による。

⑫ 渥美かをる解説『源平盛衰記』第二冊(勉誠社刊 昭和五三年三月)による。

⑬ 武久堅氏「高倉宮」の構造(武久堅氏著『平家物語の全体像』第II章 第一節 和泉書院 一九九六年八月)

⑭ 同注①②④など

⑮ 拙稿『平家物語』プロローグ部小考―四部本の形態の意味するもの―(水原一氏編『新典社研究叢書九一 古文学の流域』 新典社刊 平成八年四月)

⑯ 早川厚一・佐伯真一・生形貴重「四部合戦状本平家物語評釈」(七) 卷四(私家版 昭和六二年二月)